

担当部局

国文学科

評価項目 1	<p>(ア) 体系的な履修を促す科目編成となっているか</p> <p>(イ) 開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か</p>
参照資料	<ul style="list-style-type: none"> ・開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度） ・単位修得要領（カリキュラムマップ） ・カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック） ・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3カ年） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 国文学科では、「教育課程編成・実施の方針」に基づき、1年次の国文学・国語学に関する基礎的知識の獲得から4年次における卒業論文作成に至るまで、体系的な履修を促す科目編成がなされている。具体的には、次の通り。1年次には古典文法の学び直しから始まり（入門演習A）、国文学・国語学に関する基礎知識を身に付け（国文学基礎講座、国語学概説、国語史、国文学史など）、さらにくずし字解読の技術を修得する（入門演習B）ことによって、2年次以降に必要な基礎学力を養う。また、1・2年次を通して発展的授業（各時代及び分野別の講読）を履修することにより知識を深め、研究の方法論を学ぶとともに、2年次においては、調査能力を醸成しつつ種々の実地学習（フィールドワーク）をも体験する（基礎演習）。3年次には、専門的知識と技能をさらに深める（国文学特殊講義）と同時に、時代・分野の異なる二つの演習科目（演習I）によって、主体的調査・批判能力、合理的思考力を培う。4年次では、一つの時代・分野に絞って演習科目（演習II）を受講しながら、学びの集大成としての卒業論文を作成することを通して、一段と高い専門的知識と技能を身に付け、課題発見・解決能力を高める。その結果として、生涯に亘って学び続ける能力あるいは姿勢が確立することを目指す。

また、ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの関連を、単位修得要領（カリキュラムマップ）およびカリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック）にて確認すると、ディプロマ・ポリシーの各項目がある程度バランスよく配置されている。

(イ) 国文学科専門科目について、科目群別非常勤比率（3カ年程度）を確認すると、2021年度の場合40%に近い割合で専任教員が担当しているし（評価項目4の【検証結果（全体概要）】の（イ）参照）、履修登録者数も、特に学生同士の討論などが必要な各年次の演習科目をはじめとして、概ね妥当な人数となっている。CAP制における履修登録の上限を考慮しても、開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度）によって確認できる開講科目数は適正であると言える。

【成果が上がっている点】

(ア) 1回生対象・3回生対象の各ALCS学修行動比較調査における、「大半の授業の質」に対する満足度各88.7%・88.1%、「授業の多様性」に対する満足度各81.7%・79.7%、「総合的にみた大学での

学び」に対する満足度各 88.7%・89/8%といった、学生の履修に関連する満足度、あるいは、卒業時アンケートにおける、「幅広い知識・教養が身につけられる授業が多い」についての満足度 75.2%、「専門的な知識が身につく授業が多い」についての満足度 74.0%といった結果より窺える学生の成長実感から、体系的な履修を促す科目編成が一定の成果を生んでいることが推察される。

（イ） A L C S 学修行動比較調査における「大半の授業に関して、その履修人数」の項目の満足度は、1 回生の場合が 93.0%で全学科の中で最高であり、3 回生の場合には 86.4%で、全学科の中で下から 3 番目の低い数値となつてはいるものの、大学全体が 88.2%であるので、特に大きな問題があるとは認め難い。卒業時アンケートにおける「各授業（講義、授業、ゼミ等全部含めて）の人数が適切である」に対する満足度 64.7%（大学全体 66.7%）も、同様である。履修登録者数について、およそ学生の満足を得ていると言って差し支えなからう。また、上の（ア）の通り、1 回生対象・3 回生対象の各 A L C S 学修行動比較調査における「授業の多様性」に対する満足度は、各 81.7%・79.7%であつて、大学全体の 84.7%・83.3%よりは若干下回っているものの、それほど低い数値ではない。卒業時アンケートにおける「カリキュラム選択の幅が広い」の項目の満足度が 58.7%であるのも、低い数値のように見えるが、大学全体が 55.0%で、全学科の中で 3 番目に高い数値となっているので、開講科目数あるいは科目選択の自由度について、ある程度の満足度を学生が持っているものと捉えておいてよからう。これらのことが、前項（ア）に示した、1 回生対象・3 回生対象の各 A L C S 学修行動比較調査における「総合的にみた大学での学び」の項目についての満足度各 88.7%・89/8%という高い数値（3 回生対象の 89.8%は 3 番目の高さ）などに繋がっている面があるものと推察され、開講科目数の適正さも教育上の成果を一定程度もたらしているものと見られる。

なお、本項目の冒頭に述べた、「大半の授業に関して、その履修人数」の満足度において、1 回生の数値に対して 3 回生の数値が低くなっている点については、専任教員の減員による S T 比の増大で、1 回生時に比較して、卒業論文に直結し、より専門的な内容を学ぶ演習 I における一つのゼミあたりの学生数が多くなっていることが、影響している可能性が考えられる。

【課題となっている点】

（ア） 単位修得要領（カリキュラムマップ）を見ると、「社会性・自律性」「自立性」の項目に◎が付されている科目が二つあるいは一つだけであつて、全体のバランスを崩しているところがある。学科の特性上やむを得ない面もあろうが、今後、カリキュラムマップのあり方など、何らかの検討を加える必要がある。

（イ） 一クラスの履修人数については、講義科目の場合はそれほど大きな問題にはならないかもしれないが、演習科目においては特に、学生の満足度にも大きく影響するところがある。国文学科専門科目のうちの演習科目の場合、入門演習・基礎演習・演習 II は適正な履修人数となっているが、演習 I では、履修人数が 20 名を超過し 25 名近くになっている場合が見られる。何らかの対策が検討されるべきところであろう。

評価項目 2	各種アンケート結果等から見る、教育上で「成果があがっている点」・「課題となっている点」についての検証（※アセスメントブック検証結果から流用）
参照資料	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3 年） ・ジェネリックスキル測定テスト結果（1→3 回生の伸長・3 年） ・アセスメントブック ・授業アンケート結果（学位プログラムレベル・3 年） ・その他参照した資料（カリキュラム改善に関する学科独自のアンケート）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

アセスメントブックによって、1 回生時と 3 回生時の P R O G テストの結果を比較するに、すべての項目で 3 回生時の方が、数値が高くなっている。その間に修得度が高まったということであり、教育の成果だと思われる。その点は大学全体でも同じであるのだが、1 回生時から 3 回生時に至る間の数値の伸び幅は、国文学科の場合、大学全体よりも概ね大きくなっている。その間の修得度のより大きな伸長を実現できているのであろう。ただ、これも大学全体でも同様であるが、A L C S 学修行動比較調査の結果では、1 回生よりも 3 回生の方が、概ね低い数値を示している。実際は修得度が高まっているのに、それを実感として持ち得ていないということなのか、それとも、自らを評価する尺度が厳しくなったということだろうか。そんななか、アセスメントブックによるに 3 回生時の P R O G テストでは修得度が低かったディプロマ・ポリシーの項目、社会性・自律性③「組織の中で、自らの専門的知識・理解・技能、個性や能力を活かして協働できる。」④「適切なリーダーシップを発揮できる。」や自立性①「卒業後も生涯を通じて学び続けられるよう、自立的な学習能力を身につけている。」が、卒業時アンケートでの学生の自己評価ではいくらか改善しているようであるのは、4 回生時の演習や卒論作成、あるいは教育実習や博物館実習など学外での学習活動を経て、自らの成長を実感できたからであろうか。

やはりアセスメントブックによるのだが、国文学科の場合、能力の伸長との間で特に相関関係が高い経験は、「授業中に質問をして、よかったと思えた経験」、次いで「授業内容に刺激されて自主的にあらたな勉強や探求をしたこと」あるいは「思いどおりに学業ができていく実感」であるらしい。質問ができる環境を作り、質問を引き出す工夫をし、質問してよかったと思える対応をする。それとともに、学生にとって刺激的で、自主的な勉学を促すような授業を心掛ける。そのようにすることが特に、学生の能力伸長にとって有効に機能するようであり、また、実際しているようである。

なお、A L C S 学修行動比較調査における「教育内容と将来の進路との関連性」、卒業時アンケートにおける「将来の職業に役立つ知識・技術を身につけられる授業が多い」の項目は、いずれも一貫して満足度が低くなっている。しかし、多くの学生は、そうした将来の進路や職業との関連性の稀薄さをどの程度かは把握したうえで国文学科に入学してきているものと見られ、その稀薄さを客観的事実としてアンケートに回答しているだけであって、だから不満ということではないのではないかと推察される。

実際に、2021 年度の 4 月に京女ポータルを利用して学科が独自に行ったアンケートの「望ましいと考えるカリキュラム構成」への 2-4 回生の回答では、226 名の回答のうち、「国文学科の専門科目に重点

を置く」が 81 名、「現行のままでよい」が 122 名と合わせて 90%と高い数値を示している。ALCS への回答は、必ずしも「満足度」には直結していないように思われる。無論、学生の進路や職業に対して、学科としても可能な範囲での支援は行っている。

【成果が上がっている点】

ALCS 学修行動比較調査の項目「大半の授業の質」に対する満足度が、1 回生で 88.7%（大学全体 86.5%）、さらに 3 回生で 88.1%（大学全体 83.0%）と、大学全体に比して高い数値となっているのは、主に国文学科の専門科目の各授業担当者の取り組みや、国文学科教員の間での F D 活動がもたらした成果として、評価することができるだろう。また、ディプロマ・ポリシーの項目のうち、他学科では「日本語を正確に理解・表現できる。」となっている項目が、国文学科では「高度の日本語運用ができる。」になっているが、実際、日本語の理解・運用に関わる項目において、3 回生時の P R O G テストの数値がどの学科よりも高くなっている。「高度の日本語運用」に至っているのか否かはともかく、他の全学科を凌ぐ修得度を示していることは確かであって、当然のこととはいえ、着実な成果として捉えておいてよからう。さらに、アセスメントブックによるに、ディプロマ・ポリシーの項目のうち、知識・理解①「専門分野について、高度の知識・理解・技能を有している。」や思考・判断①「主体的で批判的・合理的な思考を展開できる。」②「広い視野と根拠に基づいて判断できる。」について修得度が高くなっているのも、かなりの部分は国文学科での取り組みの成果と見られよう。

【課題となっている点】

3 回生時の ALCS 学修行動比較調査において、「カリキュラムの表現やシラバス記述のわかりやすさ」の項目の満足度が、満足 59.3%・不満 40.7%と、全学科の中で最低の満足度となっている（大学全体では、満足 74.4%・不満 25.6%）。ただ、わかりやすさについて不満に感じているのが、カリキュラムの表現の方なのか、シラバスの記述の方なのか、また、国文学科の専門科目に関してであるのかそうでないのか、本調査では判然としない。調査の対象者である 2020 年度の 3 回生はもうすでに卒業しているので、在学生（国文学科 1 回生および 3 回生）を対象としたアンケート調査を実施して、まずは、どこに問題があるのか否か、把握する必要があるだろう。その結果次第で、必要に応じて、カリキュラムについてより丁寧に説明したり、シラバスの記述に工夫を加えたりするべきであろう。

また、1 回生対象の同調査の同一項目においては、満足 77.5%・不満 22.5%で、大学全体の満足 76.6%・不満 23.4%という状況を若干上回っている。1 回生と 3 回生との間のこの大きな差異がどこから来たものか、その点も気に掛かるところであって、問題点を把握し必要に応じて対策を講じるうえで留意しておかねばなるまい。

評価項目 3	<p>(ア) 成績評価、フィードバックは、シラバスに基づき、適切に実施されているか。</p> <p>(イ) 成績分布に偏りは生じていないか。</p>
参照資料	<ul style="list-style-type: none"> ・成績分布（G P A ・得点）（科目群別・3 カ年） ・ALCS 学修行動比較調査（対象設問） ・その他参照した資料（ 授業アンケート結果（学位プログラムレベル・3 カ年） ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア） A L C S 学修行動比較調査の「学んだ成果に対する評価のされ方」の項目では、1 回生の場合、満足が 91.5%と全学科の中で最高値となっており、3 回生の場合でも、同 89.8%と高い数値を示している（大学全体の平均値より 1 ポイントほど高い）。また、授業アンケートにおける「課題に対するフィードバックは効果的に行われていた」の項目では、国文学科専門科目の場合、「非常にそう思う」28%・「そう思う」38%（2020 前期）、同 31%・44%（2020 後期・通年）、同 40%・44%（2021 前期）、同 41%・40%（2021 後期・通年）という結果が出ている。成績評価やフィードバックは、適切に実施されているものと認められる。

（イ） 2019～21 科目区分別成績分布（評価区分別）によるに、成績分布に偏りは生じておらず、学科内においては問題ない状況と言える。科目区分別成績分布（平均得点）は 73.38 点（2019）74.99 点（2020）73.98 点（2021）、卒業生の平均累積 G P A も 2.95（2019）2.97（2020）2.98（2021）と、ほぼ一定しており、安定している。

【成果が上がっている点】

（ア） 高い数値が得られたのは、非常勤も含めた教員が、一人一人の学生の学修状況等をできる限り個別に的確に把握したうえで、きめ細かく丁寧な対応を心掛けた結果であろう。あるいは、コロナ禍以降は、対面授業ができないことに伴う学生把握に対する危機感が、上記のような取り組みを何時にも増して促進させた面もあるかもしれない。

（イ） 特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

（ア） 特筆すべき事項なし。

（イ） 特筆すべき事項なし。

評価項目 4	（ア） カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 （イ） 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・ 授業担当一覧 ・ 科目群別非常勤比率（3 カ年程度） ・ その他参照した資料（ 卒業時アンケート ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア） 授業担当一覧にある通り、国文学科において最も主要な科目と位置付けている各年次の演習科目には、ごく一部を除いて専任教員を配置している。ごく一部の例外も特殊事情による一時的なものであって、2023 年度には解消されて、全ての演習科目に専任教員が配置されることになるはずであ

担当部局

国文学科

る。その他の主要科目においても、適切な割合で専任教員を配置している。

（イ） 非常勤化率は、71.8%(2019)→69.7%(2020)→62.4%(2021)と推移しており、同率が低ければいいというわけでもなかろうが、この3年間は減少傾向にあり、他学科と比較しても、どちらかと言えば低い数値となっている。適正な非常勤化率のカリキュラムとなっていると認められる。

【成果が上がっている点】

（ア） 例えば、卒業時アンケートにおける項目のうち「少人数・ゼミ形式の授業が充実している」の満足度 72.2%、「自分を成長させてくれる教授、先生に出会える」の満足度 74.4%、「教授、先生と生徒の距離が近い」の満足度 63.5%は、特に高い数値とは言い難いものの、大学全体の各満足度 73.9%、72.7%、66.7%とほぼ同等であって、それら数値から、教員と学生との関係性がもたらすような教育的成果のあったことを一定程度読み取り得るだろうが、そのことは、各年次の演習科目に専任教員を配置していることとかなりの程度対応するものでもあろう。

（イ） 特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

（ア） 特筆すべき事項なし。

（イ） 特筆すべき事項なし。

評価項目 5	学科・専攻等個別のFD活動について、どのような内容・目的で実施しているか。
参照資料	<ul style="list-style-type: none"> ・FDの取り組み状況 ・前年度点検シート ・その他参照した資料（学位プログラムレベル（各学科）でのFDの取組計画と振り返りシート）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

国文学科では、学科会議において、課題や重点事項を共有するとともに、必要に応じて意見交換し検討を加えるという形で、継続的にFDを実施している。そうすることによって、授業そのものはもちろんのこと、成績評価やフィードバック、学業面・生活面における学生への指導と助言を、適切に行えるようにしている。例えば、初年次の少人数授業を充実させるために、教員同士で検討を重ねて「入門演習」における教材の開発と改訂につとめている。あるいは、提出された卒業論文については、その問題点などを教員全員で点検・共有し、次年度以降の論文指導に活かしている。オンライン環境でも学生達が学習に取り組みやすいような対策を、学科で話し合っ講じてきたし、大学教育の方法論や課題、教材に関する書籍を購入し、教員間で参考図書として活用している。また、学科の全教員で構成される

編集会議を随時開催して機関誌『女子大國文』を年2回発行、より充実した教育を行うための教員の研究活動を後押ししているし、必修科目を中心に、学生の履修状況や学修状況について、随時、学科会議で情報共有を行い、学業面あるいは生活面において指導が必要な学生に対して迅速に対応できるような体制を整えてもいる。最後の件については、最近に情報共有ファイルを新たに作成、ワンドライブでも随時各回生の学生の履修状況について把握し、修学指導などに活かしている。

さらに、新たな取り組みとして、「本学図書館吉澤文庫所蔵貴重書類の授業等への活用」というテーマでのFD活動を開始している。本学図書館に多く所蔵されている国文学・国語学関係の貴重書類が、教育面で充分には活用されていない現状を踏まえつつ、より特色ある充実した授業を目指してのものである。

【成果が上がっている点】

新型コロナウイルスのため引き続き学生たちの動向がつかみにくい状況であったが、学科の教員間で連携し、学生についての情報を共有しながら対応していくことにより、また、京女ポータルLMSを有効に活用することにより、一層的確な指導を行っていくことができた。

【課題となっている点】

【検証結果（全体概要）】の末尾に記したように、本学図書館に多く所蔵されている国文学・国語学関係の貴重書類が、教育面で充分には活用されていないことが以前からの課題であり、その点を改善すべく新たなFD活動を開始した。具体的には、教員全員が分担して、吉澤文庫所蔵貴重書類を一点ずつ調査・検討して解題目録を作成、その間あるいはその後に随時会議を開催して、方針の確認や情報の共有、そして授業への活用のあり方に関する協議を、繰り返す、というもの。解題目録完成が令和6年度という長期計画の取り組みであって、予備調査と協議を繰り返して取り組みの基盤を形成することが、まずは差し当たっての課題となろう。

評価項目 6	(ア) 職位、年齢、性別のバランスに配慮した教員組織編成をおこなっているか。 (イ) カリキュラムに基づく教員組織となっているか
参照資料	<ul style="list-style-type: none"> ・教員組織編制方針 ・専任教員の状況 ・その他参照した資料（ 大学ホームページ「国文学科」の「教員」紹介欄 ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 国文学科の教員組織編成は、2022年4月時点において、教授7名・准教授4名・講師1名、男7名・女5名であって、特に偏りが見られるわけではなく、バランスのとれた教員構成となっている。年齢的にも大きな問題は見られないが、60代が4名と全体の三分之一を占めるなど、やや高齢化が認められる。そこで、2023年度新規教員採用人事においては、30代前半あるいは半ばくらいの年齢層の教員を採用すべく、すでに準備を進めている。

(イ) 上代文学・中古文学・中世文学・近世文学・近代文学・漢文学・国語学・仏教学の各分野・時代

担当部局

国文学科

を専門とする教員が、それぞれ1～2名ずつ配置されており、カリキュラム・ポリシーを踏まえた、国文学科に必要な領域の教員がバランスよく在籍する教員組織となっている。

【成果が上がっている点】

(ア) 【検証結果（全体概要）】の末尾に記した 2023 年度新規教員採用人事について、具体的には、本年 6 月時点ですでに、30 代前半あるいは半ばくらいの年齢層の教員を採用する手続きに入ることができている。

(イ) 特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

(ア) 【検証結果（全体概要）】あるいは【成果が上がっている点】に述べた通り、やや高年齢化が見られるが、すでに改善すべく準備を進めている。2023 年 4 月に予定の年齢層の優秀な教員を迎えることができるよう、今後さらに採用人事を適切に進めていきたい。

(イ) 前年度点検シートに挙げられている「国語教育を専門とする専任教員の配置」については、引き続き検討課題とする必要がある。

評価項目 7	教育活動予算において実施している活動は、その目的に対してどのような成果をあげているか。
参照資料	・教育活動予算の執行状況 ・その他参照した資料（「能楽鑑賞会」「優秀論文発表会」実施後の学科独自のアンケート）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

国文学科においては、予算額 2,438,500 円に対して、執行額 1,985,692 円（執行率 81%）と、教育活動予算を概ね十分に活用している。2021 年度の教育活動予算は、大半の国文学科専門科目において求められる学生の調査研究能力の向上のための環境整備に、重点的に活用した。

また、同予算を利用して開催した 2021 年度の新入生歓迎行事「能楽鑑賞会」は、新入生だけではなく、昨年度、新型コロナウイルス蔓延のため会を開催出来ず、鑑賞の機会を得ることができなかった 2 回生も対象とした。事後に実施したアンケートには 222 名の回答があり、「日本の伝統芸能への関心が非常に高まった」80 名、「高まった」94 名、「ある程度高まった」43 名で、合計 217 名（約 97.8%）と非常に多くの学生がこの行事をきっかけに日本の伝統文化への関心を高めていることがわかる。

同じく同予算を利用して開催した「優秀論文発表会」は、優れた卒業論文を書いた卒業生（前年度 4 回生）をゲストスピーカーとして、卒業論文の成果を発表するとともに、自らの体験を踏まえて後輩へのアドバイスをしてもらい取り組みであるが、こちらへの参加学生に対するアンケートにも 63 名から回答があり、「卒論執筆に向けて非常に勉強になった」36 名、「勉強になった」22 名、「ある程度勉強に

なった」5名と、ある程度以上勉強になったとの回答が合計63名からあった。すなわち、回答者全員が一定以上の満足感を得ていることがわかる。

【成果が上がっている点】

「優秀論文発表会」の参加者の満足感については上記の通りであり、同会は、卒論指導のうえでも大きな意味を持つに至っている。教員からの指導では得難いものを、学び取り感じ取っているものと思われる。さらに、データがあるわけではないが、この会で後輩に向けて発表するというのが、一つの目標となって、卒論作成に際しての学生の意欲や向上心を高める効果をも生んでいるようである。新入生向けの「能楽鑑賞会」とともに、今後も継続していくべき重点的な企画である。

【課題となっている点】

文22-7の「学生の調査・研究能力向上のための環境整備（図書）」（学生研配架用図書）に関しては、ほぼ満額を執行できているが、「1万円未満の書籍」を対象とするため、必ずしも学生が演習等で利用する書籍が十分に購入できていないという事情がある。学生からも、現状では購入できない書籍について、配架の希望が少なくない。学生研は教員の研究室に隣接しているため、その配架図書は指導において極めて利便性が高い。教育環境のさらなる整備のため、改善を望みたいところである。

実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）

具体的な向上・改善施策（案）について

2022年度の国文学科入学者数が定員を28名上回り、158名となったことから、今後数年にわたり、履修登録者数の多い演習科目が生じるとと思われる。学生の満足度にも大きく影響する課題であることから、履修人数の調整や適正な分属が図られるよう、引き続き検討されたい。

また、FD活動に関しては「本学図書館が所蔵する貴重書類の授業への活用」ということが新たなテーマとしているが、今回の点検対象の期間内において、国文学科では当時の主任が中心となり、史学科教員との意見交換会を実施したという経験がある。未だ学部改組に向けての見通しは定かではないが、新たなテーマへの取り組みともかかわることをから、学科の枠を超えた教員の経験交流や学科合同企画の創出などに向けた取り組みも検討してもらいたい。